

事業報告書



特定非営利活動法人 W-i-N-G-一路をはこぶ

the Way Into the New Generation !

W·I·N·G !

2016 年度

仕事とは…労働とは…

数年前となりますが、「もし高校野球の女子マネージャーが…」でブーム再来となったドラッガー。彼が「非営利組織の運営」のなかで、“仕事を労働にさせてはならない”と。

これは多くの人々がそう感じることだろうと思います。しかし、抽象的な意味としては皆が理解、支持するのでしょうか、これが現場に落ちる場面になると人によってとらえ方は百人いれば百通りの理解があるだろうと思います。

他人から見れば、同じことであっても、単なる労働とを感じる人、仕事だと思う人、労働を仕事へと自力で高めていく人…。しかし、私には、多くの方は仕事のチャンスをつかめず、「せっかくの仕事を自らの手で労働にしてしまっている」ように思います。

労働のなかに面白さ、やりがいを見つけ、仕事としていくには、組織や上司の力だけでなく自らの力も求められます。その力を出そうとせずして、これは自身の労働ではなく、他に仕事があるはずだと考える人のなんと多いことか。その力なくしては、いくら転職をしてもキャリアアップとはならず、ただ転職を繰り返して時間を浪費するだけのように思えます。

特定非営利活動法人は、法人の目的が非営利なのであって、スタッフに給与を出さない組織なのではありません。ただ社会的には誤解があるようで、就職活動をする学生さんにも、この点を説明するする必要があります。

多くの学生さんは、「仕事をやりがい」を口にはしますが、給与は水準以上か▼残業は少ないか▼雰囲気はいいか▼ノルマはないか▼有給休暇は取得しやすいか▼転職時でも有利になる経験や知識、技術を教えてもらえるか…これらの条件を満たす会社を繊細な心持ちで探しています。

が、しかし…。一生懸命探して、これらの条件を満たしたはずの会社であっても、新卒の離職率が3年以内3割という現実は何を示しているのでしょうか。

重症心身障害者の地域生活、社会参加を支援することを仕事するか、労働とするか。

そこに仕事があるのではなく、自らが労働を仕事と変化させる、その力の発揮が給与となり、喜びとなる。組織に問われることであり、また自身にも問われることを知るスタッフを育む組織になりたい。

特定非営利活動法人 W・I・N・G 一路をはこび
菅野 眞弓

～ 目 次 ～

I 事業期間	
II 事業の成果	
①ホームヘルパー派遣事業	4
②国際交流事業	5
③地域交流事業	7
映画	7
フリーマーケット	10
“Tamariba”コンサート	12
ホームコンサート	13
“Tamariba”クラブ	13
“Tamariba”講座	16
④成年後見人	19
⑤被災地支援	20
⑥パラム・クム	20
⑦galerie“見る倉庫”	39
⑧スタッフ採用	41
⑨医療的ケア	41
III 2017年度への課題	42
IV 社員総会の開催状況	42
V 理事会の開催状況	43
決算報告	45

I 事業期間

2016年4月1日 ～ 2017年3月31日

II 事業の成果

①【ホームヘルパー派遣事業】

当法人の収入の大きな柱となっているヘルパー派遣事業は、引き続き今年度も重度訪問介護を中心に継続しました。

特に今年度は、複数のシェアハウスが誕生し、ヘルパー派遣は利用者一人当たりの派遣時間数、派遣日数が増加しました。一方、派遣先は減少しましたので、1ヶ月あたりのトータルでの派遣時間数はほぼ変わりません。派遣ケースは2015年度の60数ケースと比較すると30数ケースと半減となりました。

シェアハウスは利用者さんが共同で住居を借り、ヘルパーを個々に利用しながら地域生活を送ります。グループホームの報酬単価や設置基準（スプリンクラーなど）が厳しくなるなか、グループホームよりもシェアハウスに地域生活の可能性を見出す重い障害を持った方々が増えそうです。当法人以外にもシェアハウスを選択するケースが増えている印象を持っています。

しかし、意思確認が困難な重症心身障害者の共同生活のなかで、豊かな生活に向けた支援にはいくつかの課題が存在します。

- ①十分な重度訪問介護の時間数が確保できるか。
- ②生活全体を把握するのは、家族なのか、後見人なのか、相談支援なのか。
- ③入院などの共同生活を営めない場合の対処方法（家賃負担など）
- ④人材の確保

以上の4点は共同生活のスタートと同時に解決すべき問題として浮上するでしょう。

①は、支給基準が厳格化されている昨今、十分な時間数を確保するためには事前にヘルパーを確保し、実現性に問題ないことを行政当局に理解させるのと同時に、交渉を可能とするための理論武装が必要となります。

また②は、共同生活に限定されるものではありませんが、共同生活を始める前提として、ご家族は「親なき後」を想定される以上、準備が必要です。特に後見人なのか、相談支援なのか、は大きな問題です。利益相反の考え方から支援事業者が後見人にはなれませんの

で、第三者後見を検討することのなります。弁護士や司法書士、社会福祉士など本人の障害の実情をそれほど知るとは思われない第三者後見人が選任の場合、財産管理が主な業務となり、ご家族が望まれる「最後まで生活に関わってほしい」という思いには十分に届かない可能性もあります。

③については、共同生活をスタートさせる前に、共同生活者同士での取り決めを文書で作成することが求められます。特に家賃負担については、入院時には他の共同生活者が家賃負担を行うことは、限られた年金生活を送る障害者にとっては大きな負担となります。

その場合は、相談支援によって関わる方策も検討されるべきでしょう。相談支援は、ご家族が想定される業務と必ずしも一致するわけではありません。入院が長引くなどして障害福祉サービスを利用しない状態に陥った場合には、相談支援事業者が等関わる必要性が表向きなくなってしまいます。ご家族は“口約束”ではなく、制度上の担保を求められているのだらうと思われます。ご家族にとっては、後見人が相談支援なのかはあまり重要ではなく、支援と結びついた継続的な関わりを求められているのでしょう。

以上3点の解決の目途が立ったとしても、④の課題解決が大きな壁として立ちはだかります。

重症心身障害者の支援には夜間ケアが不可欠であり、夜通しの見守りが必要となる夜間ケアは、一般的には避けられる傾向があります。所属するヘルパーがいても、夜間ケアはできないという事業所が多々あります。夜間の勤務が必要な入所施設でも職員の確保に苦労している現状は、人の生活を支えるという仕事の意味の混乱、人々が求める労働条件、昨今の労働観などが複雑に絡み合っ生じており、事業所単位では解決が難しいものとなっているようです。これらを解決するために行う各事業所の工夫について、制度運用を柔軟にとらえていくことが行政機関に求められています。

また福祉を職業として選択することに対する“イメージ”の弱さも応募数が少ないことの要因の一つとみられ、イメージの改善について、「たいへんだ」という言葉ですべてを語るのではなく、「魅力」を伝える必要性を福祉従事者が今一度考える必要があります。

②【国際交流事業】

今年度はドイツから2人のボランティアが来日しました。男女各1名です。

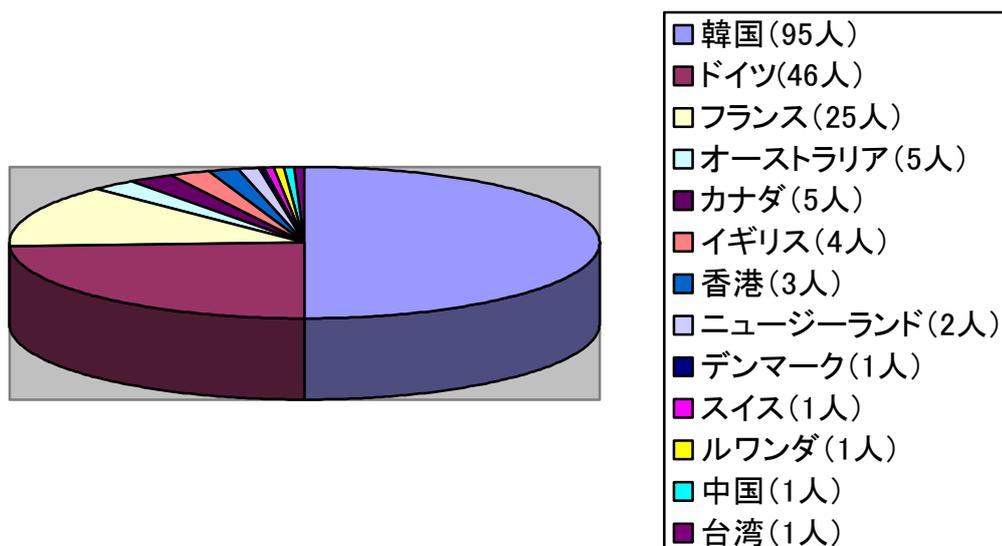
ドイツの送り出し団体である「ijgd」とは十分に連絡を取り合い、年に1回、団体からの訪問を受け、適宜課題などについて話し合っています。

このボランティア以外にも、今年は韓国2名、ドイツ3名、フランス1名、カナダ1名の計6名がワーキングホリデースタッフとして活動。また、ワーキングホリデービザ以外

では、スイス1名（留学生ビザ）、ルワンダ1名（家族ビザ）も活動しました。

一方、韓国女性に関しては、26歳以上のビザ発給が事実上停止されているようです。ワーキングホリデービザで入国し、売春容疑で逮捕されるケースが相次いだための措置とみられます。この報道を裏付けするように、韓国女性からの応募がほとんどない状態が続いています。

これまでの外国人スタッフの出身国（2000年～2016年度）



■国際交流カフェ

外国人スタッフが中心となって活躍する「国際交流カフェ」を今年度は被災地支援の一環として開催されている「ポジティブ祭」（11月23日、長居公園）で開催しました。

メニューはドイツ料理と台湾料理の2品。当初、売れ行きを心配しましたが、行列ができるほどの人気ぶり。スタッフとお客さんとの交流も自然発生的に行われました。



③地域交流事業【フリースペース Tamariba（たまりば）】

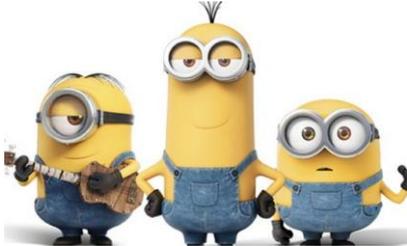
NPO 法人「サービスグラント」（東京都）による“プロボノ”支援が決定し、1年間、フリースペース“Tamariba”の活動の活発化に向け、スタッフの聞き取り、課題の洗い出しが継続して行われました。結果は2017年度に発表されます。

映画や講座、コンサート、キッズクラブの各活動は前年同様、活発に行われましたが、やはりPR不足は否めず、プロボノによる課題洗い出しやアドバイスにも期待して、2017年度はPRに力を入れたいと考えています。

映 画

日時	タイトル	地域からの参加者人数
4月9日	名探偵コナン 探偵たちの鎮魂歌（レクイエム） 	親子連れ計4名
5月14日	海街ダイアリー 	
6月11日	ワイルドスピード7 SKY Mission	親子連れ2名

		
7月9日	<p>バケモノの子</p> 	親子連れ5名
8月20日	<p>味園ユニバース</p> 	
9月10日	<p>女子ーズ</p> 	
10月8日	<p>ビリギャル</p> 	
11月19日	<p>るろうに剣心</p>	

	 <p>るろうに剣心 RUROUNI KENSHIN</p>	
12月10日	<p>ミニオンズ</p> 	親子連れ 2名
1月21日	<p>母と暮らせば</p>  <p>山田洋次監督作品 母と暮らせば haha to kuraseba</p>	
2月18日	<p>ミッドナイトラン</p>  <p>MIDNIGHT RUN</p>	
3月18日	ひつじのショー	子供 4名



2016 年度は前年度と違いチラシの発送は行わず、タマリバと夢飛行の掲示板に掲示するのみの PR とし、内輪でのイベントの色合いが濃かったものの、タマリバ通信を通じて開催を知り、常連となってくださった方がいました。

常連に対してタマリバ通信以外の広報活動をしなかったことは反省点ですが、2017 年度は、チラシを早めに作成し、参加された外部の方たちへの次回分を手渡しして、常連参加者の増加をめざしていきたいと考えています。

フリーマーケット

今年度は計 4 回開催しました。

コンサートの開催などで集客を図っていますが、なかなかです。開催内容の焦点がぼけてしまい、チラシを受け取った方も、フリーマーケットなのか、イベントなのか、子供向けのイベントなのか判断に迷うようです。

フリーマーケットの中身を精査し、しっかりとしたコンセプトで打ち出す必要があります。

コンサートは、吹奏楽部等の経験のあるスタッフの有志によるアンサンブルでイベントに花を添えています。

◆フリーマーケットの開催状況◆

開催日	イベント	出展ブース数
5 月 29 日	さんでー×たまりば×フリマ かえっこバザール 「たまりばアンサンブル」	10 ブース
7 月 24 日	さんでー×たまりば×フリマ かえっこバザール 「たまりばアンサンブル」	10 ブース
10 月 23 日	さんでー×たまりば×秋！フリマ かえっこバザール	7 ブース

	「たまりばアンサンブル」	
12月18日	さんでー×たまりば×わいわい♪ かえっこバザール	11ブース

コンサート

今年度は計6回開催しました。

毎年演奏を披露して下さる演奏家の方々も増えてきましたが、演奏家と利用者さん、法人が結びつくような雰囲気、仕掛けをスタッフが意識して築いていくことが課題です。

またタマリバコンサートは、地域の方々と障害を持った方々の出会いの場としての機能を意識して、地域の方々の来客を図る努力が必要です。地域の方々の参加が少なければ、演奏家による単なるボランティアコンサートになってしまいます。そのためのPR方法への関心をスタッフが高める必要があります。

開催日	内容・出演者	備考
4月2日(土)	SING! SWING! SPRING! 溝口恵美子 (ボーカル) 橋本裕 (ギター) 有田真大 (ピアノ) 佐々木善暁 (ベース) 石川潤二 (ドラム)	
6月8日(土)	Singin' in the Rain 東かおる (ボーカル) ジェシ・フォレスト (ギター) 野々村明 (トランペット)	

<p>8月6日(土)</p>	<p>夏の音景色</p> <p>荻野やすよし (ギター) 竹中裕深 (チェロ) 松田 GORI 広士 (ドラム) 藤村竜也 (ベース)</p>	
<p>10月1日 (土)</p>	<p>一足お先に TRICK OR TREAT !!!</p> <p>ロックンタスケロール&ザ・キャプテンス ウィング</p> <p>ジャズバンドスタイルでコミカルな演奏を 披露</p>	
<p>12月24日 (土)</p>	<p>ハッピー・クリスマス・ホリデイ!</p> <p>M's Sound Factory</p> <p>奈良を中心に活動する吹奏楽団。小編成の アンサンブルで登場。</p>	
<p>2月4日(土)</p>	<p>タマリバアンサンブル</p> <p>学生時代に吹奏楽部などで活躍したスタ ッフで構成。フルート、ピアノ、チェロ、 トランペットなど。</p>	

ホームコンサート

利用者さん宅に生の音楽を届けるホームコンサートは1回開催(8月12日)しました。

米国在住のお姉さまが夏休みで一時帰国していたのですが、米国へ帰る直前のコンサートをご家族で楽しんでいただきました。

演奏者は、辻本明日香さん(ヴァイオリン)、木村ハルヨさん(二胡)、山口聖代さん(ピアノ)の3名。

特に辻本さんはタマリバコンサートでも何度もコンサートを開催したいなどお馴染みです。



Tamariba クラブ

今年度も引き続き、大阪大学院人間科学研究科・西森ゼミとのコラボイベントを継続。計2回の開催とも定員を大幅に上回る参加があり、学生さんとも合わせ大賑わいとなりました。

教育工学を学ぶ学生が、教室とは違い、実践的な授業を経験する場としての位置づけです。学生さんの張り切りと呼応する子供たちの歓声が響き、大成功でした。

一方、参加者は予約でなく、当日参加の方が多く、蓋を開けてみないと当日の参加者数が予測できない現状は変わりませんでした。予約者を増やし、当日の準備がスムーズに進むようにPR方法に課題が残っています。

また各イベントともほぼ目標人数には達しています。参加者は幼児～小学校低学年が中心となっており、付き添いのお母様もイベントに参加しているケースが増えています。

実施日	企画	一般参加	通所者
5月21日	マジック染めで虹色バッグを作っちゃおう 	15人	3人
6月25日	超ビッグ!シャボン玉をつくろう! 	12人	3人
7月30日	カラフル☆シュワシュワ☆オリジナルバ スボムをつくろう! 	3人	4人
9月3日	プラバンでオリジナルキーホルダーをつ くろう!! 	10人	5人
10月29日	みがこう!ピカピカ泥団子 (大阪人間科学部とのコラボ)	18人	3人

			
12月3日	<p>コリントゲームを作ろう！ （大阪大人間科学部とのコラボ）</p>  	18人	4人
2月25日	<p>パターゴルフで遊ぼう！タマリバクラブ 杯</p> 	13人	6人
3月18日	<p>巨大すごろくを作って遊ぼう！</p> 	10人	7人

講座

今年度も活発に活動を展開しました。タマリバ講座は、一般的な講師一聴講といった形式ではなく、講師と参加者がより近い距離で接し、言葉を交わすことで、講義の内容を講師の人柄も含めて理解することを目指しています

また参加者の想定は、スタッフを中心に据えながらも地域からの参加も図り、立体的な交流の場として講座が運営できればと考えています。

このため今後は開催の時間帯や内容を工夫する事で、講座ごとに狙いを定めて参加者の幅を拡げていくことが課題です。また、参加を想定するスタッフに関しても、スタッフ講座の講師となるスタッフの年次などに偏りがあります。より多くのスタッフを巻き込める条件とは何か、工夫をし、多くのスタッフが交流することで、他の活動にもより良い影響を与えていきたいと思えます。

参加費は、1 回ごとの開催で収支を賄えるだけの金額設定を行い、さらには独自財源を狙っていくにあたり、参加費を高くしていく必要はあるが、参加者がほぼスタッフとなっている現状では難しい。まずは参加者の幅の拡大を先に目指していきたいと思う。

■定期開催講座

①9月6日(火) 19時～ 重症心身障がい者の医療的課題

／塩川智司氏(四天王寺和らぎ苑施設長)

収入：参加費 2500 円

開催経費：チラシ代 2350 円・謝礼 10000 円

参加者：25 名

概要：小児外科の塩川先生を講師として迎え、主に消化器系の機能と構造を中心とした重症心身障がい者が抱える医療的な課題についてお話頂いた。「治らない」ものを抱える人々を支えることの大切さ、難しさを感じた講座となった。



利用者さんのご家族の参加もあり、先生とご家族、そして法人スタッフとご家族との交流の機会にもなり、このような機会を今後も設けていきたい。

②11月12日(土) 13時半～ たまりば×しゃべりば／松居勇氏(大阪府立大学職員)

収入：0 円

開催経費：チラシ代 1660 円

参加者：23 名

概要：大阪府立大学ボランティア・市民活動センターV-station のボランティアコーディネーターである松居氏をお迎えし、大阪府立大学の学生と当法人の利用者さん、スタッフによるしゃべりばを開催し、学生、利用者さん、スタッフがそれぞれ自己紹介を行った。日々の生活の過ごし方や好きなことについて語る事で、互いが互いを知っていくことが出来たように思う。限られた時間の中でお互いがより理解し合えるように、そしてより多くの方がしゃべりばに参加できるように工夫していくことで、今後につなげていきたいと思う。



③1月28日(土) 19時～ デンマークにおける保育サービスへの保護者の参加
／佐藤桃子氏(日本学術振興会特別研究院／同志社大学)

収入：参加費 800 円

開催経費：チラシ代 3150 円・交通費 1000 円

参加者：10 名

概要：デンマークへの留学経験をもつ佐藤氏をお迎えし、「デンマーク」という国の紹介から、特別支援保育所の様子や保護者会という制度について講演を頂いた。その中で日本とデンマークの違いが大きなテーマとなった。今回の講座のように、デンマークという他の社会を知ること、今の日本の社会の良い点、悪い点を見つめ直すことができるように思う。



④3月3日(金) 18時半～ FBM 講座／大島昇氏(FBM 研究会代表)

収入：参加費 900 円

開催経費：チラシ代 1460 円・謝礼 10000 円

参加者：13 名

概要：大島氏をお迎えし、利用者さんに対して、会話の仕方、緊張のほぐし方、重心の取り方等に関して説明を行いながら、様々な体位の実演を行って頂いた。FBM にかける時間も長く取れば良いが、やはり身体の構造の理解や声のかけ方が大切になってくるように感じた。利用者さんも FBM を楽しみつつも緊張が和らぎ、リラックスしているようだった。普段では、長い時間



をかけられないとしても、どうにか日々の活動に活かしていければと思う。

■臨時講座

①8月27日(土)「風は生きよという」上映会昼の部・夜の部

収入：参加費(昼の部)10000円・参加費(夜の部)12000円・パンフレット売上3600円

開催経費：チラシ代3720円・上映料22000円・パンフレット委託料2880円・

返却郵送料510円・振込手数料80円

参加者：昼の部10名・夜の部12名

概要：昼の部、夜の部の2部制でドキュメンタリー映画『風は生きよという』の上映会を開催し、昼の部、夜の部ともに10名程の参加者が集まった。呼吸器を使用している方、重度の障がいを抱えている方の生き方、そして取り巻いている社会の在り方について考えを深める場となった。今後も他の映画の上映会を開催していきたいと思う。

■スタッフ講座

①4月30日(土)19時～ ファンドレイジング／岡村達也氏

参加者10名

概要：岡村氏がファンドレイジングについて学んだことを、参加者に伝える講座となった。今回は実践的な話ではなかったが、本講座を開催することで、「ファンドレイジングとは何か」、「ファンドレイジングに必要なこと」について考えるきっかけになった。今後、実戦形式のファンドレイジングの講座につなげていければと思う。



②6月18日(土)19時～ 仕事で使える英語講座／姜小友莉氏

参加者15名

概要：仕事の中で使う英単語・英語のフレーズの学習や外国人とのコミュニケーションについて困った経験や悩んでいることについての語り合いを行った。単語の学習だけではなく、この仕事について外国人スタッフにどこまで理解してほしいのか、外国人スタッフがどこまで理解する必要があるのかまで話し合い、外国人スタッフの気持ちも考えていく講座となった。外国人スタッフの「知りたい気持ち」、日本人スタッフの「伝えたい気持ち」をお互いに表し合えるコミュニケーション時間、質の必要性を改めて感じた。

③10月29日(土)19時～ モニタリングと個別支援計画／田代健信氏

参加者：10名

概要：1年次を中心として10名のスタッフが参加した。作成の方法だけではなく、なぜこの書類が必要なのか、どのような目的をもって作成しなければいけないのかということを中心にしていた。グループワークは少し難しかった様子だった。知らない人の支援計画をたてるのは難しく、より良い計画をたてるには相手について深く知ることが大切だと改めて感じた。



④2月18日(土)19時～ 利用者さんについて考える～脳科学の分野から～／北村昭文氏

参加者：6名

概要：参加者によって脳の構造そのものや利用者さんに関すること等関心のある点は分かれたようだが、「脳科学」「脳心理学」という分野からの話は新鮮なものとなった。今までの活動を新たな視点で考えるだけでなく、新しい取り組みへの可能性もある話であったので、何らかの形で今後に関がれば良いと感じた。

④【成年後見人】

スタッフが受任しているケースは前年度に続き、高齢者1名です。

手足の拘縮など身体機能の低下が進んでいます。また誤嚥性肺炎による2度の入院がありました。幸い短期間で退院できましたが、今後不安を抱えたままの退院となりました。

支援をしている利用者さんには、後見人が必要であろうと推測されるケースが散見されます。しかし、今すぐには必要ない、どう手続きすればいいのかわからないという方もおられ、折に触れ、お手伝いは可能であるとお話をさせていただいていますが、なかなか手続きが進まないのが現状です。

「ずっと関わっていてほしい」というご家族の気持ちを検討した場合、必ずしもそれは後見人を意味せず、相談支援のような形式であってもその気持ちにこえることは可能であると思われます。

したがって成年後見制度について継続して説明会を開催するなどの方法以外にも、相談支援事業によって支援を回るといった別の方策を検討する時期に来ているかもしれません。ご家族は制度の違い云々よりも、制度上に定められたことで支援が継続するということが安心感を求められているように思われるからです。

また当法人のサービス利用者は利益相反の考え方から当法人が後見をすることはできませんが、法人後見を志向することは法人の存在理由を強化することになり、今後検討し

たいのですが、他の法人後見のケースをお聞きすると、家庭裁判所は法人後見には相当慎重のようです。後見人のニーズよりも不祥事によるリスクを警戒している姿勢は、ある意味、後見制度の普及を阻害しているようにも思えます。

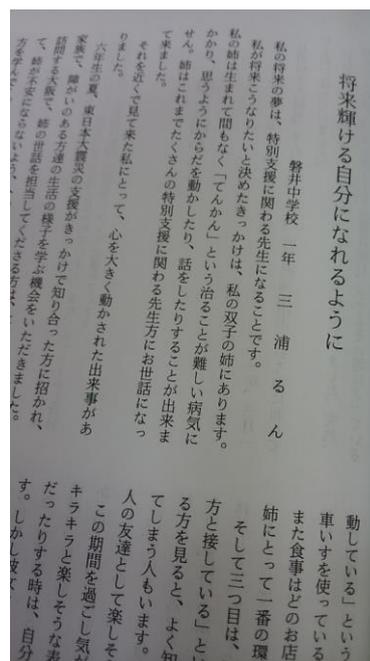
⑤ 【被災地支援】

引き続き、被災地との関係を継続しました。

うれしい知らせは5月、三浦るんさんが一関地方作文コンクールで最優秀賞を受賞したことです。るんさんは双子の姉りんさんと共に来阪。私たちの活動を見学されました。その時のスタッフの様子を見て感じたことを、作文「将来輝ける自分になれるように」にまとめてくれました。

また、12月には、大船渡の佐藤綾乃さんが修学旅行で再び来阪。宿泊先までスタッフが訪ねました。細くともつながる糸。綾乃さん、りんさんとともに学校卒業後の進路が気になります。豊かな生活が可能となる進路を選択できればと思います。

一方、スタッフでは長崎が8月、田代が11月にそれぞれ陸前高田市や宮古市を訪問し、現地のNPOやご家庭を訪ね、交流を持ちました。私たちが関係を続けるNPO「結人（ゆいっと）」は生活介護と日中一時支援事業を運営。少しずつ利用者さんも増えてきているようです。



⑥ 【パラム・クム】

アジア、特に韓国の若者と支援現場の経験を通じて、交流等を図る「パラム・クム」(風・夢)は今年度は3組を受け入れました。これまで韓国で開催された福祉フェアに出展したり、パンフレットの送付などでPRしてきましたが、インターネットで発見いただき、またそれをSNSに投稿いただくことで、徐々に来日するケースが増えてきています。順調に対

応を行い、SNSの投稿が継続することで、今後のプログラム参加者の増加に期待ができる訪問受け入れでした。

□1回目 9月26日～9月30日□

【参加者】

- Lee Ye Ji (이 예지 / イ・イエジ)：社会福祉士／女性
- Yeon Min Ji (연 민지 / ヨン・ミンジ)：社会福祉士／女性

【1日目(9/26)】

①西淀川支援学校

羽山校長より同校の概要説明を受ける。年齢や学年にとらわれることなく、児童・生徒の障害特性や個別目標によってグループ化を行い、グループ単位での授業を実施することによって、一人一人に合った個別的な教育を心がけていること、また校内にとどまらず、地域の普通校に通学する障害児への教育支援にも取り組んでいることなど支援学校の果たす役割を丁寧に説明いただいた。さらにインクルーシブ教育の潮流についても言及があり、参加者も韓国の「特殊学校」「特殊教育」との差異を感じている様子だった。その後は実際の授業や昼食準備の現場等を見学。児童・生徒の状況に応じたハード・ソフト両面の対応を、参加者も興味深そうに見入っていた。



②デーセンター夢飛行

初めての訪問ということもあり、簡単に施設内を見学した後、パワーポイント等を用いながら当法人の概要について説明を行った。組織概要、法人の理念、重症心身障害者と呼ばれる利用者のこと、具体的な法人の取り組み等を紹介。やや韓国語での説明が難しい部分もあったが、概ね理解してくれていた様子。



③大阪府社会福祉協議会

真田事務局次長より日本の社協の取り組みについて説明を受ける。韓国にも社協と呼ばれる組織は存在しており、その役割にも大きな差異はないとのことであった。ここでは「障害者福祉」に限らず、高齢者や生活困窮者を含む「地域福祉」全般の話題について情報交換をおこなった。参加者からの質問がなかなか引き出せなかったが、反対に真田事務局次長より韓国の現状について様々な質問があり、それに対して参加者2名が答えるという形で何とか情報交換も成立していたという印象であった。



【2日目(9/27)】

日程	研修内容等	備考
9/23(金)	日本入国(1200 関空着)	～9/24@京都泊
9/25(日)	来阪～ことのは入り(午後)	ことのは宿泊スタート 参加費用受領
9/26(月)	[B14/B19] ① 西淀川支援学校／見学・説明(10-12) ② 夢飛行／見学・説明(13-15) ③ 大阪府社会福祉協議会／説明(16-18) ※ことのはにて夕食	①羽山尚一氏(学校長) ③真田政稔氏(事務局次長兼総務企画部長)
9/27(火)	[A3/B10] ④ 山田さん(赤おに)一日同行(9.5-17.5) ⑤ NPO 法人ちゅうぶ／見学・説明(18-20)	④山田善亮氏 ⑤石田義典氏(事務局長)
9/28(水)	[B8] ⑥たんぼぼの家／見学・説明(10-12)	⑥成田修氏(統括施設長)
9/29(木)	[A1/A2] ⑦夢飛行／体験(-17) ※ことのはにて夕食	ことのは宿泊ラスト
9/30(金)	⑧夢飛行／研修総括(-12)	研修修了証発行 大阪市内ホテル泊

10/1(土)	韓国帰国(1815 関空発)	
---------	----------------	--

④山田さん一日同行

NPO 法人ちゅうぶが運営する生活介護施設「障害者活動センター赤おに」。その利用者であり、単身生活を送る山田善亮氏の一日に同行させていただいた。赤おにで山田氏と合流。朝礼や移動販売の準備を見学した後、出発。デーセンターモモの家、デーセンター夢飛行での移動販売に同行した。



移動販売時の主な移動手段は地下鉄。参加者が特に驚いていたのは、大阪市営地下鉄の場合、出発駅の係員に乗り換え駅や下車駅を伝えておけば、その各駅に情報が伝達され、スロープの用意等スムーズな列車乗降が可能という点であった。エレベータなどハード面でのバリアフリーは、2名が暮らす韓国・ソウルでも整備されつつあるが、こうしたソフト面での細やかな対応は皆無とのことだった。

モモの家や夢飛行ではそれぞれの利用者やスタッフとも触れ合うことができた。2名とも、利用者に対しては自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとしていた姿が印象的であった(説明に対する質問などが消極的だったためそれがより際立ったのかもしれない)。

夢飛行での販売を終えた後は、電動車椅子の山田氏に自転車で追走。赤おにに戻る。2名ともまさか海外で自転車を漕がされるとは思っていなかったためか、最初は戸惑っていたが、案外異国でのサイクリングを楽しんでいるようにも見えた。

⑤NPO 法人ちゅうぶ

最初に「ちゅうぶ」建物内の見学。その後、ヘルパー利用の当事者2名(女性)と会談。30～40年にわたる日本の障害当事者運動について、第一線に立ち続けてきた当事者たちから直接お話を伺うことができた。ここでも参加者からの質問は出ず、逆に当事者やヘルパーから韓国の現状を尋ねる場面がほとんどであった。「何を質問したらよいか分からない」という様子。また、この時お話をくださった当事者の一人のご自宅(女性・単身生活)が近所だということで、少しだけお邪魔させていただいた。一般的なアパートの室内に手すりやスロープが取り付けられており、それが100%私費というわけではなく、国からも補助が出るという点に驚いていた。

その後、石田事務局長より「ちゅうぶ」の沿革と活動の歴史を当時の写真を交えながらお話いただいた。また、過日発生した「相模原事件」についても言及。参加者もこの事件については知っており、韓国でも大きく報じられたとのこと。「韓国よりも障害者福祉が進んでいる日本でこんな悲しい事件が起きてしまうとは、にわかには信じ難かった」と伊氏。当事者運動と障害者の人権について、歴戦の当事者や支援者の視点から様々なことを教えていただいた。

【3日目(9/28)】

⑥たんぼぼの家

最初に成田統括施設長より説明を受ける。利用者の表現・創作活動としての「アート」、それ

を「就労」という形で経済的な収入と結び付けていくための「デザイン×ビジネス」、そしてそれらの取り組みを施設内に留めることなく地域を巻き込みながら進めていく「コミュニティ」——こうした主に三つの観点から「たんぼぼの家」の取り組みについて説明いただいた。その後は現場の見学。利用者やスタッフの方々も気軽に話しかけてきて下さり、2名も興味深そうに利用者の制作活動に見入っていた。

【4日目(9/29)】

⑦デーセンター夢飛行

研修期間中の訪問は3回目。2名とも幾分は場の雰囲気慣れてきた様子。ここでも、初日に夕食を共にしたことは入居者や、在日韓国人の利用者、自分たちと同年代の利用者をはじめ、一人一人の利用者と積極的にコミュニケーションを図ろうとしてくれていた。この日は「体験」を主目的としていたため、バイタルチェック～記録システムへの入力、昼食準備（昼食の刻み対応や配膳等）、口腔ケア等実際の業務をサポートしてもらったほか、医療的ケアに関する説明と実演・体験（参加者がお互いに口腔吸引をし合う／経腸栄養剤の試飲）もおこなった。参加者2名とも本来韓国では「現場のスタッフ」であることもあり、「座学」ではなく実際に身体を動かしながら見聞きする経験の方がより楽し気な表情を浮かべているように見えた。



【5日目(9/30)】

⑧研修総括

最終日。この日はアンケートの記入、修了証の授与、利用者との記念撮影をおこなって終了。最後まで「質問」が出なかったことが気になるが、2人なりに得たものは多かったという感想はいただいた。



【その他の研修内容】

※ことのはでの夕食

1日目と4日目に関しては、ことのはにて利用者・スタッフと共に夕食を摂ってもらった。通訳も兼ねることができるよう韓国人スタッフが勤務する日を選んで設定していたが、初日は韓国人スタッフも驚くほど「静か」だったそう。ほとんどコミュニケーションらしいコミュニケーションもとれなかったらしい。しかし、夢飛行やモモの家での体験を踏まえた4日目に関しては、入居者やスタッフとの触れ合いも盛り上がり、入居者との記念撮影もできたという。言語の問題はあるものの、彼女たちなりの利用者への接し方をこの短期間で見つけてくれたのかもしれない。

【アンケート回答内容要約】

「パラム・クム」に参加した動機は？

イ：海外の障害者施設がどのように運営されているのか、どんな活動に取り組んでいるのかに関心があったので参加した。

ヨン：普段なら経験できないようなことを知りたいと思った。障害児教育、福祉行政、施設での現場体験など、韓国とどこが違うのかということに関心があった。

今回のプログラムは希望に沿ったものであったか？その理由は？

イ：自分の興味関心に沿った研修内容を選択できたのが良かった。

ヨン：何を学び取ることができるだろうと考えながら 5 日間を過ごすことができ、感じたことも多かったため、満足できた。

今回の研修中最も印象に残った内容とその理由

イ：内容＝障害児教育 理由＝韓国の「特殊学校」とは授業の方法や取り組みのスタイルが異なっていたため。特に年齢や学年よりも、障害の程度や児童・生徒別の目標設定ごとにグループ分けをおこなって授業を進行していくというスタイルが印象的だった。

ヨン：内容：障害児教育・障害者アート 理由：児童・生徒を年齢や学年でなく個々の目標別にグループ分けをして授業を進めていくスタイルがとても印象的だった。たんぼぼの家では、施設長の説明の中で「仕事に人を合わせるのではなく、人に合わせて仕事を作る」という言葉が印象的だった。実際に現場を見学しながら、様々な活動に取り組む利用者の姿を見て、その施設長の言葉にも納得できた。

今回の研修中不満だった内容／その理由

※2 名とも回答無し

研修プログラム全体を通じて、改善が必要だと感じた点や問題点など

イ：研修が終わる時間が遅い日があったり、反対に早い日があったりして、体力的にしんどかった。また、費用についても少し高い気がする。

ヨン：費用がとても高いと感じた。もう少し安ければやり甲斐と釣り合ったと思う。利用者さんと一緒に過ごす施設体験の時間や、スタッフと交流・情報交換できる時間がもう少ししっかりあれば良かったと思う。自転車を漕ぐのが少し疲れた。

より専門的な通訳の必要性

※2 名とも「無し」と回答

友人や同僚にこの研修プログラムを薦めるか？パンフレット等の資料を送付したらそれを使って宣伝をしてもらうことは可能か？

※2名ともOK

全体的な感想／メッセージ等

イ：見学・訪問先ごとに詳しく説明や紹介をしてくれたので日本の福祉を学ぶことにやり甲斐を感じることができた。もしまたこのような研修に参加する機会があればもう少し言語力を身に付けてから臨みたいと思った。韓国の障害者福祉には改善しなければならない点が多々あることを思い知った。

ヨン：海外の施設がどんなものか、この研修を通じて知ることができた。いつも明るく利用者と共に過ごすスタッフの姿が見ていて素晴らしかった。

【収入の部】

費目	収入額（円）	備考
研修費	110000	55000円×2名
収入合計		110000

【支出の部】

費目	支出額（円）	備考
食費	1600	ことのは夕食(9/26、9/29)
		400円×2名(研修参加者)×2食
見学費用	6000	「たんぼぼの家」見学料(9/28)
		2000円×3名(研修参加者+担当スタッフ)
交通費	1860	阪神高速道路通行料(9/28)
		930円×2(往復分)
	1640	第二阪奈有料道路通行料(9/28)
		820円×2(往復分)
	4145	レンタカー使用料(9/28)
	633	レンタカーガソリン代金(9/28)
支出合計		15878

収支差額	94122
------	-------

【総括／今後に向けて】

これまでの参加者が、企業（福祉・介護用品メーカー）の商品開発部署社員や訪問看護師協会会員からなる「団体」参加であったのに対して、今回は初の「個人」参加であった。きっかけは、伊氏が「海外ボランティア」といったキーワードでインターネットを検索したところ、当方で活動経験のある元ワーキングホリデースタッフの個人ブログに辿り着いたことだった。そのブログに法人 HP の URL が貼り付けられており、そこから「パラム・クム」の存在を知ったという。

従来は「研修費用の捻出が個人レベルでは抵抗感が大きいのではないか？」という観点から、主に「団体」（福祉系大学や障害者福祉系事業所）をターゲットとする PR 活動を展開してきた。しかし、実際にはなかなか応募団体が見付からず、受け入れが実現した訪問看護師協会やメーカーについても、本来「1 人当たり」で設定していた研修費用を、先方との話し合いで「1 団体当たり」の費用に圧縮されてしまったために、設定通りの事業収入を得ることはできなかった。また、大人数での参加（訪問看護師協会）や市場調査に主眼を置いた参加（福祉・介護用品メーカー）であったが故に、「体験重視」を含む当方の趣旨に沿ったプログラムの実施がやや困難であった。

それと比較すると、今回の個人参加では、本来の設定通り「1 人当たり」の研修費用を得ることができたほか、参加者が障害福祉の現場での勤務経験を持っており、かつ 2 名という少数であったために、細やかな対応や「体験重視」というプログラムの趣旨を全うすることができた。

費用面では、今回は乗用車での移動を最小限に抑え、公共交通機関（費用は参加者自己負担）や当方送迎車（通常の送迎ルートのみ）での移動を主としたために交通費の支出は圧縮できたが、今後も同様の手法を採ることができるかどうかは、訪問先の場所（遠近）や訪問箇所の多寡等、ケースバイケースとなることが予想される。また、より専門的な通訳をアウトソーシングする必要が生じる場合も相応の人件費支出を見込まなければならない。

今回は 2 名というごく少人数の参加であったこと、説明形式よりも現場見学・体験形式を主とする研修内容であったために「簡単な日常会話＋翻訳しやすい福祉用語（漢字熟語）」レベルでの対応が可能であろうと判断したことから、プログラム担当者（田代）が通訳を兼ねることとした。しかし、実際に通訳を受け持った感想としては、日常会話における一般的な語彙の不足に悩まされた部分が大きかったように思う。例えば、「筆・糸・布・へら」といった「モノの名前」や、「厄除け」といった「使用頻度はあまり高くないが一般的な生活用語」をすぐに翻訳できなかったことなどが挙げられる。

また、説明形式の場では、説明者の言葉を「逐語的」に通訳することが難しく、自分が持っている語彙の範囲で可能な「要約的」な通訳に終始していたことも反省点の一つである。今回のアンケートでは通訳について「不満は無い」という回答であったが、プログラム担当者自身の語学力のブラッシュアップとともに、研修内容や参加者の状況に応じたアウトソーシングもまだまだ想定しておく必要はあるだろう。

今後の全体的な方向性としては、今回の参加者が個人ブログをつてに当プログラムを知ったと

ということもあり、参加者＝体験者を通じた個人的な繋がりや口コミ(ブログや SNS での拡散も含む)をこちらからも積極的に促すことにより、本当に「社会福祉に興味関心のある」2～3名(最大でも5名程度か)規模での継続的な応募を生み出すことが出来れば理想的だろう。一方で、「モニター事業」等を通じた「団体」へのアプローチも継続しながら、このプログラムを「独自財源」として軌道に乗せることを目指していきたい。

□2回目 2月13日～2月15日□

【参加者】

■Son Hye Min (손혜민 / ソン・ヘミン) : 大邱韓医大学校(中等特殊教育科)3回生/女性

■Kim Soo Jin (김수진 / キム・スジン) : 大邱韓医大学校(中等特殊教育科)3回生/女性
※療養のため不参加※

■Bae Ji Yeong (배지영 / ペ・ジヨン) : 大邱韓医大学校(中等特殊教育科)3回生/女性

【1日目(2/13)】

①建国中学校・高等学校

社会福祉との直接的な関連は無かったが、韓国在住でしかも教育を学んでいる参加者にとって、在日韓国入子女がどのような環境で教育を受けているのかという点は関心も高いのではないかと考え、試験的にオプションとして研修内容に追加した。

李光衡(イ・グァンヒョン)校長は韓国出身の方であったが、主に見学の案内をしてくださった洪(ホン)教頭は日本出身の方で、「日本で生まれ育った在日韓国人」でありかつ「教育者」という立場から語られる教頭の言葉に、参加者も興味深そうに耳を傾けていた(通訳不要で助かった)。

幼稚園～高校までが同じ敷地内にある私立の学校法人であり、卒園・卒業すれば、一般の幼稚園～高校卒と同じ取り扱いとなる「一条校(学校教育法第1条に該当する学校)」であるため、授業は基本的に日本語で行われ、内容も日本の一般学校と同様。韓国語や朝鮮半島の伝統文化を学ぶ授業は「付加的に」実施されている。「一時的な外国在留邦人子女」のための学校ではなく、あくまでも「外国で生まれ育つ同胞子女」のための学校であるという点が、海外にある「日本人学校」との違い、日韓関係の特異性?を物語っているように思えた。

参加者の二人は、在日韓国人について「見た目は全くの韓国人だが、日本語しか話すことができない」



というイメージを持っていたようで、園児や生徒たちが校内ですれ違う際に韓国語で挨拶をしてくれるという状況に、嬉しくもあり、不思議な感触も持ったように見えた。

日程	研修内容	備考
2/12(日)	日本入国	■ ことのは 泊スタート ■参加費受領(26000円×2名)
2/13(月)	【研修1日目】 ①建国中学・高校／見学(11-12) ②光陽支援学校／見学(14-16) ③夢飛行／スタッフとの交流・意見交換会(18.5-)	①洪隆男＝ホン・ユンナム氏(教頭) ②酒井友行氏(首席教諭) ③たこ焼きパーティ ■日中は大槻さん同行／車移動OK
2/14(火)	【研修2日目】 ④夢飛行／体験(10-17) ⑤ことのは／見学・夕食・入居者との交流(-20)	④昼食は瀬戸さん調理分を ⑤金榮根＝キム・ヨングン(韓国人スタッフ) ■ことのは往復→送迎車
2/15(水)	【研修3日目(最終日)】 ⑥大阪北視覚支援学校／見学(10-12) ⑦中央聴覚支援学校／見学(14-16) ⑧ことのは／研修総括(1630-17)	⑥太田直哉氏(教頭) ⑦阪本友輝氏(教頭) ⑧研修修了証発行 ■地下鉄移動 ■ ことのは 泊ラスト
2/16(木) 2/17(金)	【自由行動※研修期間外】	■宿泊先は自主確保

②光陽支援学校

酒井首席の案内で午後の授業風景～下校準備、通学バスや放課後等児童デイサービス事業所の送迎車による下校風景を見学。その後、資料を用いた概要説明を受けた。特別支援教育を専攻していない教員であっても、一定の研修受ければ支援学校で勤務することができる点や、重症心身障害児の医療的ケアを教員が直接担うといった点に、参加者は韓国の特別支援教育との大きな差異を感じていたようだった。韓国では「特殊教育」を専攻した教員でなければ「特殊学校」や「特殊学級」に配属されることはなく、重症心身障害児については、そもそも「通学」できているケースをほとんど見かけないという。

また、昨年(H28年)9月に別の参加者と西淀川支援学校を訪れた際と同様、今回の参加者も、学年や年齢ではなく児童・生徒の障害特性に応じたグループ化とそのグループ単位での授業実施＝個別的な教育対応、一般校に通学する障害児の教育(学校・教員に対する)支援＝校外での取り

組み、車椅子固定機能付きの通学バスなど＝ハードウェアといった肢体不自由児／重症心身障害児の支援学校ならではの特長に関心を寄せていたようであった。

③デーセンター夢飛行／スタッフ・利用者との交流会

今回初めての試みとして法人スタッフとの「交流会」を企画した。終業時間後ということもあり、スタッフに対して事前に強く参加を促すことはできなかったが、参加スタッフの協力により 10 名弱のスタッフ(韓国人スタッフ 1 名含む)と夜間ケア・ガイドヘルパー支援中の利用者 2 名にも参加してもらうことができた。



日本人スタッフと参加者の間には言葉の壁はあったものの、利用者も交えて一緒にたこ焼きを作りながら賑やかでアットホームな時間を過ごすことができていたように思う。しかし「意見交換」というレベルでの交流会を実現するためには、時間帯や言葉の壁、事前の内容検討など改善の余地はまだ多い。

【2日目(2/14)】

④デーセンター夢飛行／現場体験

宿泊先になっていることからは、利用者と送迎車に同乗して夢飛行へ。施設の簡単な案内の後、午前中は利用者のバイタルチェック～記録システム入力、昼食調理のサポート等を体験してもらった。昼食休憩を挟んで午後からは、医療的ケア(模型を使った気管カニューレ内吸引／参加者同士でお互いに対して行う実際の口腔内吸引)と日中活動への参加(バレンタインデーギフトの手渡し)を体験。自身が将来勤めることになるかもしれない「特殊学校」(支援学校)を卒業した人たち＝利用者、しかも韓国ではあまり出会う機会のない重症心身障害者との直接的な触れ合いは、参加者にとっても刺激的だったらしく、「利用者と触れ合う時間が短かった」という感想もあった。



⑤ことのは／現場体験

再びことのは入居者と送迎車に同乗しことのはへ。生活支援員として夜間ケアに入る韓国人スタッフのサポートのもと、夕食づくり～夕食の時間をスタッフ・利用者と共に過ごした。

【3日目(2/15)】

⑥大阪北視覚支援学校

最初に太田教頭による概要レクチャー。「視覚」障害ゆえの



教育方法の特徴を実演(アイマスクを装着した状態で口頭のみによる指示を受けるなど)を交えて教えていただいた。その後、授業風景の見学や図書室等での教材紹介を通じて、「視覚支援」ならではの教授方法や教材の特徴を学ぶ。参加者が最も関心を寄せていたものの一つが「教材・教具」であったため、最新の拡大鏡や点字翻訳ボランティアによる豊富な点字書籍等が特に興味を惹いたようであった。

⑦中央聴覚支援学校

阪本教頭による日本版手話を交えた学校概要のレクチャーの後、校内見学。ここでは教材・教具よりも設備に関する説明の割合が大きかったため、参加者は少し「物足りない」という感想も持ったようだが、教頭から即席で教わった日本語の手話で生徒と挨拶を交わした時などは笑顔も見られた。また、視覚支援学校・聴覚支援学校ともにそれぞれの障害を持つ教員が授業を担っている点にも関心を示していた。

【アンケート回答内容】

(1)「パラム・クム」に参加した動機

ハミン：日本は福祉の文化や制度、特に障害者福祉については韓国よりも早くから発達していたので、その辺りが気になっていた。また、障害児教育についても、児童・生徒の障害の種類によって支援学校も分かれているため、各児童・生徒の障害類型に応じた教育方法や教材・教育施設がどのように整備されているのか気になっていたため研修に参加した。

スジン：大学で特殊教育を専攻しており、授業の中で障害者施設や特殊学校についても学んだが、韓国よりも日本のほうが障害者福祉の施設・環境面でより発達していると聞き、直接自分の目で見てみたいと思ったため、研修に参加した。

(2)(3)今回のプログラムは希望に沿ったものであったか？その理由は？

ハミン：希望に沿っていた／自分の希望に合わせて内容を選択できたため。

スジン：希望に沿っていた／障害者福祉における韓国と日本の違いを知ることができたため。

(4)(5)今回の研修中最も印象に残った内容とその理由

ハミン：内容＝光陽支援学校（肢体不自由児／重症心身障害児教育） 理由＝①韓国では大学で「特殊教育」を専攻しなければ特殊学校(支援学校)や特殊学級(特別支援学級)に配属してもらえないが、日本では「普通教員免許」のみでも特別支援教育の研修を受ければ、支援学校で勤務できるというのが不思議だったため、印象に残った。

②韓国では気管切開や胃瘻といった医療的ケアが必要な児童・生徒については、病院にいなから「遠隔教育」という形で授業を受けることが一般的だが、日本ではそういった子どもも普通に学校に「通う」ことができおり、看護師だけでなく教員が医療的ケアに当たっているという点がとても印象に残った。

スジン：内容：光陽支援学校（肢体不自由児／重症心身障害児教育） 理由：韓国では重症心身障害児をあまり見かけることがないが、この学校には多くの重症心身障害児が通っており、そうした児童・生徒のために、教員も医療的ケアをおこなうという点がとても印象に残った。

(6)(7) 今回の研修中不満だった内容／その理由

ハミン：内容＝中央聴覚支援学校（聴覚障害児教育） 理由＝私が主に興味関心を持っていたのは「教育方法」や「教材・教具」であったが、この学校では「学校探訪」に終始していたように感じたため。

スジン：内容＝建国中学校・高等学校（在日韓国人子女の教育） 理由＝在日韓国人の子どもたちと会えたのはとても楽しかったが、校長先生のお話が…少し聞いていて疲れる内容だった。

(8) 研修プログラム全体を通じて、改善が必要だと感じた点や問題点など

ハミン：スタッフとの交流の時間があればと思った。

スジン：生活介護やグループホームの利用者・スタッフとの交流の時間が短かったのが少し惜まれる。

(9) より専門的な通訳の必要性

ハミン：感じた／日常的な会話の通訳は問題なかったが、支援学校見学时に専門的な用語や学校の体制についての質問に対する回答が少し理解しにくかった。

スジン：特に感じなかった

(10)(11) 友人や同僚にこの研修プログラムを薦めるか？パンフレット等の資料を送付したらそれを使って宣伝をしてもらうことは可能か？

ハミン：OK

スジン：OK

(12) 全体的な感想／メッセージ等

ハミン：韓国と日本では「障害」というものに対する見方が大きく異なっていると感じた。また、生活介護やグループホームの施設で働くスタッフや利用者と共に過ごす中で、スタッフの人たちがお金を稼ぐ手段としてというよりも、本当にこの仕事が好きで働いているということを感じて感動した。

スジン：今回の研修を担当してくださった田代さんが通訳として大変な努力をしてくださったこと、そして他のスタッフの方々も私たち二人のためによくしてくださったことに感謝いたします。研修を通じて日本の障害者福祉の全体的な状況や、施設や学校といった現場の雰囲気や、直接肌で感じながら学ぶことができて良かったです。

【収入の部】

費目	収入額 (円)	備考
研修費	52000	26000 円×2 名
収入合計		52000

【支出の部】

費目	支出額 (円)	備考
交通費	2575	カーシェアリング料金(2/12)
	1400	駐車代金(2/13)
		800 円(建国学校見学时)+400 円(昼食休憩時)
支出合計		3975

収支差額	48025
------	-------

□3 回目 2 月 23 日～2 月 24 日□

【参加者】

<仁川発展研究院 福祉政策センター 社会サービス支援チーム>

- Jang So Hyeon (장소현 /チャン・ソヒョン): チーム長代理/女性
- Park Jin Myeong (박진명 /パク・ジンミョン): 主任/女性
- Lee So Yeon (이소연 /イ・ソヨン): 主任/女性

日程	研修内容等	備考
2/22(水)	日本入国	17:00 到着予定
2/23(木)	【研修 1 日目】 ①株式会社アワハウス(10-12) ②夢飛行/見学・体験(14-17)	①東二郎氏(業務推進部 取締役部長) /植島淳氏(業務推進部 教育課課長) /関口かおり(人事部)
2/24(金)	【研修 2 日目】 ③大阪市ボランティア・市民活動センター (10-12) ④機関車/見学・体験(14-16) ※以降、自由時間	③脇坂博史氏(センター副所長) /堀江幸代(市社協・福祉総括室 主 幹)/修田翔氏(センター職員)
2/25(土)	韓国帰国	

【1日目(2/23)】

①株式会社アワハウス

事前に参加者から提出されていた質問事項に対しては文書で回答をいただいております、それ以外の質疑応答という形で研修を進めました。日韓双方の障害者福祉制度の他、「ヘルパー派遣」に対する考え方の違い(利用者「個人」への支援/利用者「宅(家庭)」への支援)など、様々な情報・意見交換の場となった。その後、アワハウスで実施している喀痰吸引等研修の一部の実演(人形を用いたシミュレーション)や同社独自制作の「車椅子講習ビデオ」の上映等を通じて、日本における「介護の担い手」の育成の在り方についても、参加者が垣間見る機会を得ることができた。



②デーセンター夢飛行

施設を一回りする見学の後、日中活動の様子を見てもらいながら、ペーパーによる法人の説明・質疑応答をおこなった。法人独自の取り組み(国際交流・Tamariba等を活用した地域交流・ビー玉アートを通じた芸術活動等)、日本の障害福祉サービスの仕組み、重症心身障害者を巡る状況、NPOという組織の在り方などを紹介。参加者からは特に施設運営面での質問が多かった。また短時間ではあったが、日中活動、間食の準備、送迎車添乗の体験も実施することができた。



【2日目(2/24)】

①大阪市ボランティア・市民活動センター

同センターの脇坂副所長より、現在同センター開設30周年記念事業として力を入れている取り組みの紹介をいただいた。企業・商店による社会・地域貢献促進、子どもと高齢者の「居場所」づくり、障害者の地域社会参加、地域課題の解決当事者育成、都市型の地域防災対策、多文化共生の促進、ボランティアコーディネート…話題は多岐にわたったが、韓国における社会問題とも共通する部分が多く、互いに情報交換をおこなうことができた。



②デーセンター機関車

利用者のそばで一緒に映画鑑賞をしたり、天井走行リフトで利用者の「移動」を体験してもらうなど、夢飛行とは異なるコンテンツで研修を進めることができた。参加者からは、「重症心身障害者の生活介護施設」という同性格の施設を2箇所訪問するよりも、もう1箇所別分野の機関・団体を訪問したかったという声もあったが、「重症心身障害者の支援現場」における「体験」を重視した研修趣旨と、参加者の研修可能な日程により制約があったことは否めない。

【アンケート回答内容要約】

(1)「パラム・クム」に参加した動機

チャン代理：日本の社会福祉の動向を掴み、多様な機関・団体を直接訪問することで社会福祉に関する見聞を広げると同時に、韓国社会福祉にも適用できそうな事例を発掘しようと思い、参加しました。

パク主任：他の機関・団体を直接訪問し、そこで取り組まれている活動の中で、自身の業務を推進していく上で参考になりそうなものを学びたいと思い参加しました。

イ主任：日本の福祉が韓国よりも進んでいるということ、頭では分かっていたのですが、実際の現場を見て経験したことがなかったので、今回の研修に参加しました。

(2)(3)今回のプログラムは希望に沿ったものであったか？その理由は？

チャン代理：はい／①プログラムに関する情報をインターネットで簡単に入手することができる上、プログラム内容を自由に選択してスケジュールに合うよう構成できる点が良かった。②そうしたプログラムに関する情報が韓国語で掲載されていることも便利だった。

パク主任：はい／特にアワハウスでの取り組み（ヘルパー派遣・養成）が、自身の実際の業務と関連しており、とても参考になったため。

イ主任：はい／研修参加動機に見合った研修内容であったため。

(4)(5)今回の研修中最も印象に残った内容とその理由

チャン代理：

■内容＝①アワハウス（ヘルパー派遣／養成）

②デーセンター機関車

■理由＝①事業所の運営システムに関する詳細な説明が印象深かった。また事業所内部の人的・物的資源を活用した様々な取り組み（例：車椅子を使った移動介助の解説ビデオ制作等）は効率的で素晴らしいと感じました。②とても快適な施設で、ケアをおこなう上で必ず必要になる設備（リフト等）が完備されている点が印象深かった。また、重症心身障害者と呼ばれる人たちの意思疎通の力や感情表現については、私ではまだまだ分からない部分が多かったが、スタッフの皆さんが利用者さんたちに対して偏見無く愛情をもって接している姿を見て感動的な気持ちになりました。

パク主任：

■内容＝①アワハウス（ヘルパー派遣／養成）

②デーセンター機関車

■理由＝①アワハウスは先の質問で回答した通り、自身の業務に関連した取り組みをおこなっている事業所だったので参考になったため。②デーセンター機関車については、韓国と類似する部分も多かったが、利用者とスタッフ双方に配慮の行き届いた設備が整っていた点が非常に印象深かった（天井走行式リフト等）

イ主任：

■内容＝デーセンター機関車

■理由＝利用者さんたちのことを常に見守りながらケアするスタッフの皆さんがすごいと思いました。「肉体的にもかなりハードなはずなのに…」と考えていたことが面目無いと感じるほどに、スタッフの皆さんは常に笑い、しかし常に利用者さんの状態に目を向けながら仕事をしていました。そうした姿に心から尊敬の念を抱きました。

(6)(7) 今回の研修中不満だった内容／その理由

チャン代理：内容＝特に無し。

パク主任：内容＝①デーセンター夢飛行 ②デーセンター機関車

■理由＝2箇所の日センターを見学させていただいたが、2箇所とも「見どころ」やプログラムとしての内容が似通っていたため、どちらか1箇所だけでも良かったのではないかと感じた。

イ主任：内容＝大阪市ボランティア・市民活動センター 理由＝相対的に考えると、自身の業務との関連性が低いように感じたので…。しかし、韓国でも現場で活動する人たち（社会福祉館職員など）にとっては有用な内容だったのではないかと思います。

(8) 研修プログラム全体を通じて、改善が必要だと感じた点や問題点など

チャン代理：WINGのスタッフさんともっといろいろな話をしながら情報交換できたら良かったと感じました。現場での興味深い、独特な取り組み事例をリアルに聞かせていただきたかったです。

パク主任：もっと多様なプログラムが企画されていたらと感じました。時間的な余裕があれば、スタッフの皆さんにインタビューできる時間を作ってもらえたらより充実していたのではないかと。

イ主任：同じ性格の施設（夢飛行と機関車）を訪問するよりは、性格の異なる別の機関・団体をもう1箇所回りたかった。

(9) より専門的な通訳の必要性

チャン代理：特に感じなかった

パク主任：特に感じなかった

イ主任：特に感じなかった

(10)(11)友人や同僚にこの研修プログラムを薦めるか？パンフレット等の資料を送付したらそれを使って宣伝をしてもらうことは可能か？

チャン代理：OK

パク主任：OK

イ主任：OK

(12)全体的な感想／メッセージ等

チャン代理：大阪市の社会福祉をめぐる状況は韓国とも類似している点が多々あるように思いました。現場で活動する福祉従事者の人たちが、困難な状況にあっても利用者のために最善を尽くしている姿は韓国も日本も同じなのだ。私も社会福祉の研究者として、また行政マンとして、現場の声や現状に耳を傾け、努力しなければならないと思いました。田代さん、とても親切に対応していただいたばかりでなく、通訳として正確な説明を下さり、ありがとうございました！田代さんの熟練した韓国語のおかげで全く不便さを感じることなく研修に参加することができました。

パク主任：私は韓国の社会福祉を専攻していたため、大学の授業や今の仕事の中でも、日本の社会福祉についていろいろと学ぶ機会がありました。それはやはり、日本の社会福祉がとても進んでいて、韓国にとってのベンチマークとなる点が多かったからだと思います。そういった経緯でよく耳にしていた日本の社会福祉を直接見学という形で目の当たりにしたことで、社会福祉専攻者として、また福祉従事者として、多くのことを得ることができました。また良い機会があれば参加したいと思います。そして、通訳として尽力くださった田代さん、ありがとうございました。おかげでとても有益な時間になりました。

イ主任：外国で社会福祉の現場を見る経験はとても興味深いものでした。最初は言葉の壁がある中で、どのように説明を聞き、理解すればよいのだろうと心配もしましたが、田代さんのおかげで不便を感じることなく研修に参加できました。デーセンターの利用者さんには私がいることで、かえって迷惑だったのではないかと心配でしたが…それでも短期間の研修であったにもかかわらず、とても有意義な経験でした。そして、日本の福祉従事者の皆さんに対しては、とても感動を覚えました。ひとえに、利用者さんたちのためにと毎日忙しく立ち回られている皆さんに改めて敬意を表します。

【収入の部】

費目	収入額（円）	備考
研修費	54000	18000円×3名
収入合計		54000

【支出の部】

費目	支出額（円）	備考
交通費	8658	カーシェアリング料金(2/23)4329 円+同(2/24)4329 円
	4500	駐車代金(2/23)2400 円+同(2/24)2100 円
支出合計		13158

収支差額	40842
------	-------

【総括／今後に向けて】

今回初めて、ひと月に2件連続で研修を受け入れることとなった。1件目(2/13～2/15)は「3日間コース」2名(予定では3名だったが、1名体調不良により不参加)。特別支援教育を専攻する大学3年生であった。2件目(2/23～2/24)は「2日間コース」(本来は設定していない)3名。自治体と国が出資して設立された社会福祉系シンクタンクの職員であった。

1件目についてはプログラムコーディネートの準備期間も充分にあったため、これまで実施したことのなかったスタッフとの交流会や、本来メニューにない「在日韓国子女の教育現場」というオプションコンテンツにも挑戦することができた。交流会は人数集め～会の段取りや、その場での相互コミュニケーションの促進という面で課題を残したので、次回実施の際は改善を図りたい。「在日韓国子女の教育現場(建国中・高校)」訪問は、参加者が教師の卵であったこともあり、試みに盛り込んでみたものの、思っていたほどには反響は大きくなかった。かえって「朝鮮学校」訪問の方が様々な意味でより一層興味深いコンテンツになったのかもしれない。

2件目については、準備期間が1ヶ月も残されておらず、先方の都合で「2日間」(本来最短のコースは3日間)という日程的な制約もあったため、訪問先の選定や「現場体験」の組み込み方等に苦慮した。また、訪問先に対する事前質問事項について「事前の書面による回答がほしい」という若干無理のある要望もあった。結果的には、訪問当日の質疑応答で事足りたようで、ともかく要望には応えることができたようであった。

今回の2件について共通しているのは、昨年9月下旬の受け入れが「個人」でのプログラム応募であったのに対して、1件目は「大学」、2件目は「職場」、いずれも参加者が自身の所属する機関・団体から研修費用等の補助を受けて応募してきた点である。1件目の学生らは大学の海外研修助成制度(申請制)を利用して、2件目は職場研修の一環(業務命令)としてそれぞれ応募してきており、1件目のほうがより「自主性」の高い応募だったと言えるが、いずれにせよ当初課題としていた「個人応募では負担が大きいと思われる研修費用を機関・団体に補助してもらえたら…」という部分が一応は実現したことになる。こちらから機関・団体をお願いをしたわけでは

ないが…。

このようにして今年度は、①全くの個人による応募、②個人が主体的に機関・団体からの補助を引き出して応募、③「業務」として職場の補助を受けて応募、といった 3 つのパターンを研修受け入れ先として経験することができた。

一方、当方の研修プログラムを「どのようにして知ったか」については、2月1件目の学生らは、昨年9月参加者が本プログラムへの参加体験記を掲載した「個人ブログ」を見て興味を持ってくれたという。いわば理想的な「口コミ」に近い形であった。一方2件目のシンクタンク職員については、参加者らの上司が、職員の海外研修先(少人数でも催行可能な研修)をインターネットで探していたところ、担当者(田代)が韓国語で掲載している本プログラム用のブログで、昨年9月の受け入れの様子を知り、応募を打診してきたというパターンであった。

今回の2件の参加者に対しては、プログラムの参加体験等を積極的に個人のSNSや職場HP等に掲載してPRに協力してほしいと依頼しており、担当者による「一次的」な発信に加えて、「口コミ」という「二次的な発信」の連鎖が良い形で続いていくことに期待したい。

プログラムの活動収支については、今回の2件(5日間)を合計すると、収入が10万円強であるのに対して、支出は約1万7000円。差額としておよそ9万円の利益を上げることができた。今回のように連続的な応募があった場合の費用対効果(研修内容のコーディネートにかかる労力と時間、研修期間中に滞る本プログラム以外の業務量を勘案した時の収支バランス等)については、まだ吟味の余地が残されているものの、その「吟味」に実効性を伴わせる意味でも、様々な受け入れパターンの経験を蓄積できるよう、「年間に一定程度の受け入れ件数を確保」することが先決だろう。その点を念頭に置きながら、今後もプログラムの推進に取り組んでいきたい。

⑦【galerie “見る倉庫”】

利用者さんとそのアート、一般アーティスト、地域…3者の交流を図る galerie “見る倉庫” の活動は、アーティストの出展も増え、順調でした。

また徐々に展覧アーティストと利用者さんとの交流も増えています。来年度はより活発な活動を展開したいと考えています。

一方、ギャラリーにより多くの方々には足を運んでいただく工夫が引き続き必要です。場所の不利はあるものの、地域の方々気軽にアート楽しめるような空間とするには、Facebook やパンフレットの作成だけでなく地域に向けた PR の実践が求められます。また作品の販売にも力を入れ、出展者には表現の場だけでなく魅力を訴求したいものです。



⑧【スタッフ採用】

2016年度は、前年度と同数の7人の新人採用を行いました。

就職サイトで就職活動を行う学生さんにPRする方法も従来通りですが、民間企業の採用需要が強まるとともに、採用状況は年々厳しくなっています。

入管法の改正により、介護福祉士の資格を持つ外国人には就労ビザ（介護分野）の発給が可能となりました。すでに専門学校ではベトナム、フィリピンなどアジアの国々からの留学生が増加し、また高齢者施設では外国人介護労働者に人材確保を期待するところも多いようです。

ただ介護福祉士の試験を突破するのは、外国人にはなかなかハードルが高いように思われます。それ故に合格した外国人は相当程度の日本語を身につけているものと推測はされますが、一方でその語学力を生かして転職を目指すようになるのは時間の問題のようにも推測されます。日本人が去る職場は外国人も去ります。

外国人の定着を図るためには、外国人の文化等に配慮することもあります。それに加え日本人と同等に扱い、安い労働力との認識を他のスタッフが持つことのないような管理職の意識が重要でしょう。

長年、ワーキングホリデーで来日した外国人青年をスタッフとして受け入れてきた経験は、この点をクリアすることに大いに役立つものですが、一方、国際交流という観点から離れ、まったくの同僚として接した場合、これまで見過ごしてきた日本語力の差をどう受け入れるのが課題となります。ご家族とのやり取り（電話や送迎時）や記録、文書の読解などを他の業務で補おうとした場合に、外国人だから“皿洗い”といった具合ではやはり外国人は長続きしないでしょう。

⑨【医療的ケア】

今年度も引き続き、登録喀痰吸引等事業者（登録特定行為事業者）として、スタッフの医療的ケアの研修を行い、認定特定行為業務従事者（特定の者対象 3号研修）の認定の取得に努めました。

介護福祉士に医療的ケアの学習が必須となっていますが、高齢者が想定されており、3号研修については、また別途取得の必要があります。

当法人のように、医療的ケアを必要とする利用者さんが多数となる場合、認定書類が数が膨大となります。1人の利用者さん、1人のスタッフごとに認定証が必要となるからです。また、医療的ケアの行為が一つ追加されると、その度に認定書を取得する必要があります。その認定書取得のために費用も数百万円となります。一体、誰のための制度でしょうか。

家庭内で行われるケアについては、当事者間で十分な合意を得て、それを文書に残すという方法も検討されるべきであると考えます。現在の制度下では、医療的ケアに取り組む法人は増えないでしょうし、制度の複雑さから、逆に医療的ケアにしり込みする法人が増えるはずです。

多くの議論は、「事故があったらどうする」という視点から発生していますが、生活支援という視点に立てば、「そのケアが行われず、その人の“生”が奪われたらどうする」という面から議論が必要です。

Ⅲ 2017年度への課題

- 採用活動
男性スタッフの積極的採用。利用者さんの将来に備えられるようなスタッフ体制の構築。シェアハウスなどの進展。
- フリースペース“Tamariba”
より一層の活用、PR方法の検討、実践。
- 記録の整備
さまざまな記録（ヘルパー記録、イベント活動記録等）を省スペースで管理、保管する。
- 医療的ケア
医療的ケアを行うための研修を計画的に実施し、利用者さんのケア状態、新しい利用者、スタッフの異動などに備える。

Ⅳ 社員総会の開催状況

名称：「特定非営利活動法人 W^or^ld N^eg-路をはこぶ総会」
日時：2016年4月13日
場所：西成区民センター大ホール

正会員数：80人

出席者数：72人

議案：第1号議案 新卒スタッフの採用

第2号議案 2015年度決算

第3号議案 2016年度予算

審議結果：全議案について、出席者全員の承認、賛成を得られた。

名称：「特定非営利活動法人 W□□N□G-路をはこぶ総会」

日時：2017年4月5日

場所：西成区民センター大ホール

正会員数：84人

出席者数：78人

議案：第1号議案 新卒スタッフの採用

第2号議案 2016年度決算

第3号議案 2017年度予算

審議結果：全議案について、出席者全員の承認、賛成を得られた。

V 理事会の開催状況

日時	出席者	議案	審議結果
2016年4月25日	理事6人	2015年度決算 スタッフ採用 タマリバ活動について	全議案承認
5月25日	理事6人	ヘルパー派遣事業について タマリバ活動について 個別支援計画	全議案承認
6月24日	理事6人	ヘルパー派遣事業について タマリバ活動について 個別支援計画	全議案承認
7月25日	理事6人	ヘルパー派遣事業について タマリバ活動について 個別支援計画	全議案承認
8月25日	理事6人	ヘルパー派遣事業について タマリバ活動について 個別支援計画	全議案承認
10月25	理事6人	ヘルパー派遣事業について	全議案承認

日		タマリバ活動について 個別支援計画	
12月22日	理事6人	ヘルパー派遣事業について タマリバ活動について 個別支援計画	全議案承認
2017年2月 24日	理事6人	2017年度予算案 ヘルパー派遣事業について タマリバ活動について 個別支援計画	全議案承認

VI決算報告

平成28年度 特定非営利活動に係る事業収支計算書

特定非営利活動法人 ウイング路をはこ

ぶ

2016年4月1日から2017年3月31日まで

(単位：円)

科 目	最終予算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 支援費収入		126,630,158		
2 自己負担金収入		23,117		
3 実費負担金収入		14,300		
4 助成金収入		0		
5 受取利息収入		445		
6 その他収入		1,181,932		
7 収益事業繰入金収入		0		
当期収入合計 (A)		127,849,952		
前期繰越収支差額		36,412,853		
収入合計 (B)		164,262,805		

Ⅱ 支出の部			
1 事業費			
人件費	85,060,051		
法定福利費	8,658,559		
旅費交通費	3,170,965		
消耗品費	1,216,653		
賃借料	8,035,592		
水道光熱費	1,165,500		
業務委託料	2,648,411		
保健衛生費	216,949		
保険料	1,063,060		
教養娯楽費	265,656		
減価償却費	763,129		
修繕費	11,450		
研修・人材開発費	920,067		
慶弔費	93,200		
雑費	2,412,565		
2 事務費			
事務用品費	1,207,936		
通信運搬費	1,122,979		
福利厚生費	1,600,787		
租税公課	92,700		
広報費	4,523,733		
監査・税務報酬	1,851,420		
雑費	3,700,954		
3 予備費			
当期支出合計 (C)	129,802,316		
当期収支差額 (A) - (C)	-1,952,364		
次期繰越収支差額 (B) - (C)	34,460,489		